

學海の巨人

廣井勇先生

1928年10月1日

東京帝大で工學辭典の編輯打合會の第何回目が開催された、廣井博士も委員の一人として出席され、編輯事務の進捗に就て勵行的な希望を述べて歸宅された。

大學から歸宅されて間もなく博士は狭心症のために呼吸を引取られた、永いわづらもなくまことに突然な事であつた。

宗教的出發

廣井博士の宗教的方面は餘り世に知られてゐないが、内村鑑三氏や新戸部稻造氏は廣井博士と同期の札幌農大出身である、内村氏が宗教家として立つ希望があつた時、廣井博士も同じ希望であつたが、日本の國狀は歐米に比し科學的に最も遅れてをる、而して經濟的に産業最も不振であるから先づ之を振興しなければならぬと云ふので、土木工學の方面に没頭される事になつた。

名利眼中になし

學者であるから直接事業には關係されませんが、物質的に日本を富したいと云ふ希望は最初から強大であつた、随つて國家的事業を目指すものはそれが民間營利事業であつても大に意見を述べて其事業を助成するに努められた、然し乍ら其が爲めに決して謝禮を受けられない、自己の名利に淡泊なる點は當世稀なものであつた。

世界的な學究

橋梁に關する研究論文を米國雜誌に發表して日本の工學的な權威を外國に示した最初の人には實に我が廣井博士であつた。博士の橋梁に關する公式と、波浪に關する公式とは今日世界の工學界に使用されてをる。

廣井博士と學閥

大學の學閥の八釜しい明治三十二年頃に東

京帝大の教授となられたのは、廣井博士が如何に學者として權威を認められてゐたかを證する。

然し帝國學士院に列せらるべき學徳は充分にありながら遂に其事なかつたのはやはり學閥の爲と見るより外はない。

強い責任感

責任感の強い廣井博士は何事にも深く宗教的信念に立脚してゐられた。

工事畫報本年一月號の先輩記事號の中に寄せられた小樽港工事施工の自責的態度の崇高なる信念はまことに技術界のみならず一世の師表たるべきものである。

唯一人の努力

上海の築港計畫に就て支那政府は大正十年日、英、米、佛、伊の五ヶ國から代表的技術者を招聘して設計上の意見を求める事とした我國の代表として廣井博士が出席された。

英、米の兩代表者は上海に着く前に既に船中で揚子江の河口を浚渫する案を協定してをつた、廣井博士が河口浚渫案に反對説を述べられても、英、米は之を取合はない、英、米の意見は、浚渫した處が萬一埋れば又掘直すこと云ふ位にアツサリしてをるのであるが、責任感の強い廣井博士は中々そんな事に賛成する筈がない、何の程度に浚渫するか、之を研究調査して自説を通す爲めに二週間と云ふもの殆んど不眠不休の努力をされた、而して遂に上海築港決議録に廣井博士の自説を載録せらるゝ事になつた。

歐米先進國の一流の學者と同居して斯くまで堂々と自説を強調なし得る人は恐らく廣井博士の他には其人がないと思はれる。

最も此の時のみは廣井博士も心身の過勞で歸朝された時は非常に衰弱されてをつた。

表面の冷淡

廣井博士は人を面責される事があつても決して責任を他に殘さない人であつた。

表面は不親切、皮肉な様でも内實は慈愛に満ちた親切があつた。

人が何か依頼に行くに随分アツケナイ應接に終る、見込はないミアキラメてをるに異ふ先日の依頼の件は意外にも果されてをるに云ふ風であつた。

技術的な確信

大正九年に廣井博士が釜山の築港を視察された時、當時釜山の棧橋は方向が悪い、船着きが悪いと云ふ世評があつた、博士に同道した朝鮮の某大官も此の世評を聞いてをるので、博士の傍に寄つて、

「此の棧橋では船長が閉口してをる」
 と言つたら、廣井博士は他を見ながら
 「そんな船長は取換たら良らう」

一見識

H地方の某港灣工事の防波堤が竣工後に幾年ならずして砂の爲め埋められた、此の調査を廣井博士に托せられた、博士は現狀調査ののち設計圖の古い原圖を引っぱり出して精細に點檢し、鉛筆書きで何回も消したり書いたりした線の跡を見付けて、扱て曰く、圖で見ると砂防堤を造る設計であつたが、工費の関係でそれが實現出来ず遂に斯くなつたのは残念であるを報告された。

慈父の愛にもまさる眞情

懇意に云ふ程でもないが、博士の知つてをる或る若い技師が僅かの引掛りで入監する事になつた、博士は早速其技師を見舞ふて、決して落膽するなと云ふて種々慰めの言葉を與へ、尙ほ刑期がすんで出て來たら必ず御世話をするからこの事であつた、而して實際其の技師は後日博士の世話で今日立派な請負業者としてやつてるのである。

一意唯國利

鬼怒川水力電氣の工事は當時天下の一大難工事であつた、鬼怒電社長は東京帝大工學部に指導を依頼したところ、帝大から廣井博士を推薦した。工事完成の後に社長は廣井博士に金一封の謝禮を以つて行つた、廣井博士は其禮金を謝絶して曰く

鬼怒電の工事は個人の山師的なものでない

國家的の事業である決して謝禮なきに及ばない、其金を以て工事を一層完全にされ度い。

名利に屈せず

淺野總一郎氏は天下の事業家だけに自分の事業には必ず其の道の權威ある學者の意見を求める、此點に於ては有ゆる學者の參邸を乞ふのであつたが廣井博士だけは曾て一度も之に應じられなかつた、そこで多忙な淺野氏も自ら博士邸を訪れて意見を聞くのであつた。

温情

用事があれば自分から來るが良い、と云ふて遂に一度も淺野邸に行かれなかつた廣井博士が、タツタ一度だけ淺野邸に行かれた。

それは淺野氏糟糠の夫人を亡ふた時であつた、恐らく誰よりも一番先に弔問されたのが廣井博士であつた。

師弟の感

博士の恩顧をうけてゐた某社の重役は曰く私は常に廣井先生から種々ご指導をうけてゐたので、今度旅行から戻つて先生の柩に接し今まで温い光をうけてゐた太陽が急に没した様な感にうたれました云々、

恐らく之は廣井博士の學徳を最も良く言ひ現したものであらうと思ふ。

舊師の墓前に最後の知友

廣井博士は札幌大學當時ハリス師から洗禮を受けられて本年が恰度五十年目になるので六月二日ハリス師の墓參をされた、五十年前俱に洗禮をうけられた、新渡戸稻造氏、内村鑑造氏、其他二人の友人と俱に舊師の墓前に會して五人で記念の寫眞を撮された。

其寫眞は先生最後のものであつたが、平日の元氣な面影がハッキリと現はれてゐる。

其の六月二日の舊師墓前の會合で、廣井先生は内村鑑三さんに

「私ももう近い内だらうから葬は君に頼む」
 と云はれた内村氏は
 「君が一番若いのに」

と笑はれたが六月一日廣井博士の訃報を聞いて内村氏は一番に驅け付けた。